

# 第4回 お念仏ってなんだろう？

## 1 お念仏は誰のための教えなの？

ざいあくじんじゅうぼんのうしじょう しゅじょう  
罪悪深重煩惱熾盛の衆生

家のお内仏やお墓の前、お寺の本堂などで手を合わせて「南無阿弥陀仏」と口に出されたこと（称名念仏）があると思います。

私たちは、どのような思いでお念仏申しているのでしょうか？

「阿弥陀さま、どうか私の願いをかなえてください。」

「阿弥陀さま、どうか私の悩みや苦しみをなくしてください。」

家族のため、先祖のため、自分のためと思いの先は色々あるかもしれませんが、自らの望みを仏さまにお願いすることがあるように思います。

お念仏とは、そのような私たちの願望を満たしてくれるものなのでしょうか？



みだ ろうしょうぜんあく よう  
弥陀の本願には老少善悪のひとをえられず。ただ信心を要とすとしるべし。  
そのゆえは、ざいあくじんじゅうぼんのうしじょう しゅじょう  
罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。

『歎異抄』第一条

前回、「南無阿弥陀仏」とは、「どのような者であっても握め取って決して見捨てることはない」という阿弥陀仏の願いが「南無阿弥陀仏」のお念仏の声となって名のり出たものであることを学びました。

では、その仏の願いは、どのような者に差し向けられたものでしょうか。

阿弥陀仏の願い（本願）とは、日々の現実のなかで悩み苦しむ者をこそ救おうとするものである、と親鸞聖人は教えられます。

聖人は、七高僧のお一人である源信僧都に依って、どこまでも自らの欲（思い）によって真実に背いていく者に阿弥陀仏の名号（「南無阿弥陀仏」）を称することを勧められているのです。

極重の悪人は、ただ仏を称すべし。 われ せつしゅ  
我また、かの摂取の中にあれども、煩惱、  
まなこ き 目を障えて見たてまつらずといえども、大悲倦きことなく、常に我を照したまう、  
といえり。 『正信偈』源信章

浄土真宗で正依の經典とされる「浄土三部経」のひとつである『仏説観無量寿経』（観経）は、現実に起きた事件によって深く悩み苦しむ韋提希という夫人の要請に<sup>こた</sup>応え、お釈迦さまが説かれたお経です。そこにはお釈迦さまの教説により、自らの思いを超えて阿弥陀仏の願いに出遇っていく一人の人間の姿が表されています。

## 2 『観経』には何が説かれているの？①

おうしゃじょう

### 王舎城の悲劇

『観経』のはじめには、「王舎城の悲劇」と言われる親と子の間で起こった身心を引き裂く悲しい事件が説かれます。お釈迦さま在世（今から2500年以上前）のことですが、現代の私たちも同様に抱える人間の問題性があきらかにされています。

お釈迦さま晩年のことです。マガダ国で、太子である息子が王である父を幽閉して殺し、王位を奪うという事件がありました。

首都の王舎城に、王である頻婆娑羅<sup>びんばしやら</sup>と妃である韋提希<sup>いだいけ</sup>は暮らしていました。二人の間には一人息子の阿闍世<sup>あじゃせ</sup>がありました。

ある時、お釈迦さまの従兄弟である提婆達多<sup>だいばだつた</sup>にそそのかされ、阿闍世は王位を奪うため、父である頻婆娑羅王を牢獄に閉じこめ餓死させようとし、しかし、韋提希が食べ物を隠して運び、獄中の王は生きながらえます。そのことを知った阿闍世は怒り狂い、母である韋提希も幽閉してしまいます。

幽閉された韋提希は、悲しみと憂いのなかで、耆闍崛山<sup>ぎしゃくっせん</sup>におられるお釈迦さまに向かい、仏弟子との面会を請いました。その思いに応じて、仏弟子とともにお釈迦さまは韋提希の前に現れます。その姿を見た韋提希は、身につけていた装飾品をかなぐり捨て身を投げだして、号泣して訴えます。

「わたしに過去になんの罪があって、このような悪い子を生んだのでしょうか。お釈迦さまはどうして、息子をそそのかすような提婆達多と親族なのでしょう。」



その韋提希の言葉にお釈迦さまは何も答えません。

事件のなかで、どこまでも自らの立場を守ろうとし、物事の責任や理由を他に転嫁しようとする韋提希のあり方があきらかにされます。

それは韋提希だけのあり方でしょうか？

何も答えないお釈迦さまの沈黙を通して、韋提希は我が子が起こした問題はその子だけの問題ではなかったのではないかと自問し、次第に自らの罪を自覚していきます。そして、自らの都合や思いによって互いに傷つき背きあいながら生きるすべての者がともに救われていく世界を韋提希は願い、お釈迦さまはその韋提希の要請に応え、教えを説かれるのです。

我いま極楽世界の阿弥陀仏<sup>あみだぶつ</sup>の所に生まれんと樂う。唯<sup>ねが</sup>、願わくは世尊<sup>いや</sup>、我に思惟<sup>しゆい</sup>を教えたまえ、我に正受<sup>しょうじゅ</sup>を教えたまえ。 『仏説観無量寿経』

### 3 『観経』には何が説かれているの？②

かんそう しょうみょうねんぶつ  
観想と称名念仏

阿弥陀仏の極楽浄土に生まれたいと願う韋提希に対して、お釈迦さまはどのようなことを説かれたのでしょうか？

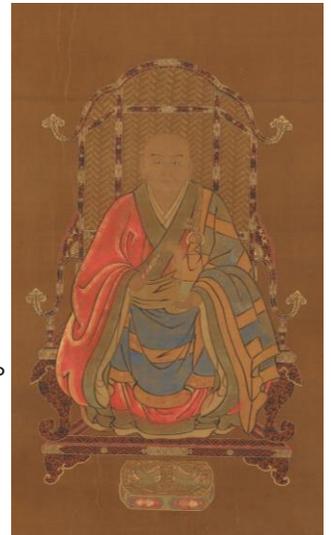
お釈迦さまは、極楽浄土に往生するための十六の<sup>かんぼう</sup>観法を説かれます。この十六の観法のうち、前十三観を「<sup>じょうぜん</sup>定善」といい、後三観を「<sup>さんぜん</sup>散善」といいます。

定善…心を静かに落ち着け、雑念を払い、浄土のありさまや仏の相<sup>すがた</sup>を思い浮かべること  
散善…心が散乱した普段の生活の中で、悪をやめ善を修めること

「定善」では、阿弥陀仏の浄土や仏・菩薩を<sup>かんざつ</sup>観ずる観察の方法（十三観）が説かれます。「散善」では、人びとがそれぞれの資質や能力に応じた修行により浄土に往生する様子（三観）が説かれます。

『観経』は、古く中国において、自らの力によって精神を集中し心を静寂に保ち続ける修行のなかで、仏の姿と浄土のありさまを心に<sup>み</sup>観る観想の念仏を説く経典であると解釈されてきました。

しかし、七高僧のお一人である善導大師は、『観経』の最後に「汝<sup>よ</sup>好くこの<sup>ことば</sup>語<sup>たち</sup>を持て。この語を持てというは、すなわちこれ無量寿仏の名<sup>みな</sup>を持てとなり」と説かれることに着目されます。『仏説無量寿経』に説かれる阿弥陀仏の本願に立つならば、『観経』は縁によって生きるすべての人（凡夫）に称名の念仏を勧める経典であると明らかにされました。



善導大師（絵像）

上よりこのかた定散<sup>やく</sup>両門の益を説くといえども、仏の本願の<sup>こころ</sup>意を望まんには、衆生をして一向に専ら<sup>みな</sup>弥陀仏の名を称せしむるにあり

善導大師 『観経疏』

そして親鸞聖人は、お釈迦さまが様々な善行が説かれたのは、自力の善行を修めることが困難なことを教え、称名念仏を勧めるための手立て（方便）であると受け止められたのです。

Q. 仏教の修行というと、どのようなものを思い浮かべますか？

## 4 お念仏するとどうなるの？

## ■ むなしくすぐるひとぞなき

『観経』のなかで、韋提希は一つの事件によって、今まで自分がたよりとしていたものがことごとく打ち砕かれてしまいました。

私たちは、これまで積み重ねてきた自分の努力や能力、築き上げてきた周りとの関係などをよりどころとし、時に神社やお寺でお願い事をしたりもします。誰もが何かをたより、何か信じられるものを求めて生きているのではないのでしょうか？

一般的に何かを信じる、信仰するという時には、その自らが信じたことによって自分の願いがかなっていくことを想像します。

自らの善根において信を生ずることあたわず。仏の名を聞くに由<sup>よ</sup>って信心を起<sup>よ</sup>こすがゆえに  
『教行信証』

しかし親鸞聖人は、信心とは自らの心で起こすものではなく、「南無阿弥陀仏」という仏の名を聞くことによって起こるものだ<sup>と</sup>教えられます。

『観経』では、王舎城の悲劇という事件への具体的な解決策は説かれませんが、お釈迦さまの教えを聞くなかで、自らの罪を自覚しすべての者がともに救われていく世界を願う韋提希の姿が表されています。その姿こそ、一人の迷い深い人間が阿弥陀仏の本願に出会い、凡夫が凡夫として立ち上がり仏道を歩みだす姿だと確かめられてきました。

「称名念仏」は、自らの心や精神を統一し、仏に一步一步近づいていくような修行とは異なります。いま口に称える「南無阿弥陀仏」は、仏の願いが私たちのうえにはたらきでたものです。どのような自分であっても、どのような人生であっても、ただ念仏するところに仏の願いはすでに私のうえに成就してあるのです。

お念仏とは私たちの願望を満たす手段や道具ではなく、悩みや苦しみを抱きながらも、お念仏申すところに自分の都合や思いを超えて、すべての存在と共なる自己であったと、他者と出あっていく道がひらかれてくるのではないのでしょうか。

名号<sup>みょうごう</sup>を称<sup>しょう</sup>すること、とこえ、ひとこえ、きくひと、うたがうところ、一念もなけれ<sup>ば</sup>、実報土<sup>じつほうど</sup>へうまるともうすところなり。  
『一念多念文意』

### 先師の言葉

お念仏は 讚嘆<sup>さんだん</sup>であり 懺悔<sup>さんげ</sup>である (金子大榮)

称えながら聞く念仏 (桐溪順忍)

## 南無阿弥陀仏

「南無阿弥陀仏」はもともとはインドの言葉で、その言葉に中国の漢字を当てた（音写した）ものです。

「南無」は、古代インドの言語であるサンスクリット語（梵語）の「ナマス（*namas*）」という言葉に由来します。その言葉の意味は「敬い信じてしたが順う」であり、その意味から「帰命」とも訳されます。

「阿弥陀」は「アミターバ（*amitābha*、無量光）」と「アミターユス（*amitāyus*、無量寿）」という言葉に由来します。

「阿弥陀」という言葉には、どのような者も分け隔てなく照らし、一人も漏らすことのない「無量光」と、私たちにいつでも、どのような時でもはたらきかけられている「無量寿」という二つの意味が表されています。

阿弥陀仏とは、無量光・無量寿として表されるように、いかなる時代のいかなる者も「選ばず、嫌わず、見捨てず」掬め取って捨てない「掬取不捨」を誓われた仏さまです。

そのような「阿弥陀仏」を「敬い信じて順います」ということが「南無阿弥陀仏」です。

そして、親鸞聖人は「阿弥陀仏に南無せよ」という仏から私たちへのはたらきかけとして「南無阿弥陀仏」をいただかれました。私が「南無する」に先立って、仏の方から「南無せよ」とはたらきかけてくださっていると教え示されています。

ほんがんしょうかん ちよくめい  
（本願招喚の勅命）



六字名号（ご真筆）

『正信偈』の冒頭には、「南無阿弥陀仏」とお念仏申すことと同じ意味の言葉が置かれています。最初の二句である「帰命無量寿如来 南無不可思議光」がそれにあたります。

「帰命」と「南無」は同じことを意味し、「無量寿如来」と「不可思議光」はいずれも「阿弥陀仏」のあり方をあらわしています。

日頃『正信偈』をお勤めするとき、「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」とお念仏申すことから始まる場所に、日々の生活のなかで仏の願いに立ち帰っていく意義があると思われれます。

